

神夢幻奏曲

natsumi1208

1. はじまり

見たことがないような豪華な馬車にゆられて、ぼくは外を見ていた。

否、見ていない。

眺めているだけだ。

窓から少し身を乗り出して、右を見てみると、他は真っ黒なのにその一面全体がまだ赤い。

大地が赤黒く揺れている。天が赤く染まり、まるで別世界で。

そんな景色を見ていると、さっきまで思い出せなかった2人の顔をふと思い出すことができた

。

それだけで、側にいない2人の顔を想うだけで、体の力が抜けていくのを感じる。

大切な人を失った今のぼくにとって、

2人はぼくの特別だった。

2人はぼくの支えだった。

2人はぼくの気持ちを分かってくれる唯一の存在だった。

そっと眼に触れる

涙は出てこない。

まだ泣いてはいけないような気がするから。

まだ、2人を信じているから。

たぶん、ぼくはもう、あの2人以外誰も信用できないから。

みんな、みんな、嘘つきだ。

2人はぼくの事をどう思っているかなんて分からないけど、

本当にぼくは、2人と友達になれてよかった。

この先何があっても、最期がどうなっても、

2人と出会えてよかったって、言い切れる。

ありがとう。

ごめんね。

ばいばい

また、会えるかな

また

あの2人の笑顔を

『いっぱい泣いて、幸せになって』

だから、

神夢幻奏曲

「...、ここに、住むの？」

「なんだ嫌か？」

「嫌、というか.....、テオには？みんなは？」

「お前が寝てる間にもう先に入ってるよ」

「そっか」

「すまないな、俺の仕事に付き合わせて」

「もお、それ何回目？しょうがないでしょ」

おれは頭上に下ろされた荷物の、ずしんとした重さに耐えられずに顔をしかめていると、無駄に背が高いおとさんが軽く笑って、再び荷物を持ってくれた。

「これが新しい家だ」

新らしい家と呼ばれた白い壁の家は、おれがいる場所から全体を見回せきれないぐらい、とてつもなく大きいことが人目で分かる。玄関には堂々と門があって、おとさんがその門を開いた途端、家の扉まで続く煉瓦道と、それを覆い包むようにある綺麗な花のアーチが目に入り圧倒されて、目を見開いた。天気の良い青い空にそれらはとても映えて見える。

おれが今まで住んでいた家には、門なんてものは無かったし、ましては緑の芝生の綺麗な庭なんてなかったし、ましては噴水とかありえないし、そしてもっとも、あの馬鹿でかい最低都市には花のアーチどころか、花なんてものはなかった。

だからこれがどんな名前の花か全然分からない。

ただ綺麗だな、と感じた。

呆然としてたおれを見てたのか、おとさんはまた軽く笑って、大きな手でおれの頭を撫でてから花のアーチの中に足を踏み入れて煉瓦の道を歩いていく。おとさんは振り返らない。あの白い家に吸い込まれるように歩き続けておれからどんどん離れていく。

おれはその背中を追えずにいた。

はっきり言って怖い。

だっておとさんは、あの時から変だ。

あの時はそう思わなかったけど、後々考えたら、あの時のおとさんは明らかにおかしかった。

あの時というのは、緑がいっぱいあるこの村に着く前で、コルネットを出る前で、引っ越しが

決まった数週間前だ。すごく遠く感じるけど、そんなに前ではない。でもその間におとさんは、
太り気味が激痩せ気味になったし、前みたいに大きな声を上げて笑うことがなくなった。

そしてついに、おれと目を合わせなくなった。

まるで何かを恐れてて、必死にそれを隠してて、それを感じるたび、おれはおとさんに見放された気分になる。

そこまで思考を巡らせてから我に返ると、おとさんはすでに家の前にいて、扉を開けようとしていた。やっとおれは煉瓦を踏み花のアーチを仰ぎ見て、そのままぐるりと一回転して周りを見回してみる。目に映る全てのモノが新鮮だった。コルネットからのここへの道は馬車だったが、ずっと起きて外を見ていれば良かったと思いながら、ただ何となく、後ろを振り向いた。

その途端、おれの体が強張る。

花のアーチの入り口に綺麗な人がいたからだ。

藍のかかった黒の髪に、紫の瞳。顔が整ってて気品があり華奢で、間違いなく少年だが少女にも見える。フード付きの大きめなコートを羽織って、黒の半ズボンという服装はちぐはぐで、分厚そうな上着は夏なのに暑くないのかなと思うし、この家に似合わないし、そして、この村にも何だかそぐわない。おれのようにここの人間でないのかもしれない、と思った。おれと同じぐらいの年齢に見えるその子は、フードを目のすぐ上までかぶり、身動き1つせず、おれをじっと見ている。

それは探るような目だ。

これが多分、おれの体が動かない理由だ。

その瞳はおれが味方か敵か見極めてて、敵だと判断した途端、

きつと————

ふ、と前触れもなくその子の視線がおれの頭上に上がって、おれは呪縛から解き放され自然と上を向いた。

「ハルシオン様」

いつの間にかすぐ後ろにおとさんがいて、深々とその子に頭を下げた。おれもとりあえず頭を下げてから、おとさんの後ろに隠れる。

「ご無沙汰でした。白鳥エマです。これは息子のヒナです」

「存じています」

おとさんにハルシオン様と呼ばれた彼はそう短く答えながら歩み寄ってくる。

おれと変わらない年に見えるのに、おとさんの彼に対する態度や彼の言葉遣いが、おれには何だか居心地悪い。

おれはおとさんの陰から顔だけをのぞかせて、そのまま、また目を離せないでいた。

おれを見ていないはずなのに、家の方を見ているはずなのに、おれは彼のまとう雰囲気、美しい相貌に、立ち振る舞いの1つ1つに、彼の全てに、畏怖している。

おれのすぐ隣をすれ違うとき、ふわっとした不思議な香りがした。

「君が感じたことは、間違っていない」

その香りを感じたのと同時に、おれにしか聞こえないぐらいの声で彼がそうはっきりと言う。途端、全身から汗があふれ出すのを感じた。

それでいて、すう、と血の気がひいたのも感じた。

おれは振り返られなかった。

「さあ、行くか」

「……」

「ヒナ？」

「…え、あ、なに？」

おれの頭に再びおとさんの暖かい手のひらが触れて、体の力が抜けそうになった。後ろをちらっと見ると、彼はもういなかった。

「顔色が悪いな。まだ馬車酔い治らないか？ここは暑いしなあ」

「あー、ううん。大丈夫」

「ならいいんだがな」

「ねえ」とおれに背中を向けて家の方へ歩きだそうとしたおとさんの上着の裾を引っ張った。おとさんは顔だけ振り向いて、「どうした」と軽く微笑む。

「あの子も、一緒に住むの？」

「あの子？ああ、ハルシオン様か」

おとさんは「はは」と枯れた声で笑った。

「ハルシオン様が怖いか？」

「うん。なんか殺気がした。おれ、殺されるかも」

「でもな、人は見かけで判断したら駄目なんだぞ」

つん、と鼻のてっぺんを軽く突かれた。

「ハルシオン様はキティハルト様の御子孫だ。あと、俺の上司にあたる人の娘のリリィさんがいらっしゃる。二方とも、ヒナと同じ10歳だよ。上司だの何だのに関係なくお前は子供なのだから、仲良くさせてもらいなさい」

「さあ行くぞ」とおとさんは上着を掴んでいたおれの手のひらを握ると、歩き出した。おれはおとさんの横に並び、真っ直ぐ前を見て歩く。白い馬鹿でかい家は、ただ静かにたたずんでいて、こんな家がおれたちの家になるとは何故かといえてい思えなかった。

2

「ここがお前の部屋だ。あとで大広間においで」

おとさんはそう告げ部屋から出て行って、おれは1人になった。

ここまでの——ベリーメリーまでの3日間の馬車の旅の疲れが、さっきまでも寝ていたはずなのに、突然体を重くさせる。

おれは部屋の左手の奥の角に配置してあるベットになだれ込むように寝転がった。

自然と重い瞼は閉じていく。時計が時を刻む音しか聞こえない。だからおれはそのまま寝たつもりだった。

いつから聞こえていたのか分からない。

ピアノの音色。

ついで、バイオリンの音。

そして歌声まで聞こえてきた。

癖のあるそのピアノの音色は誰のものかは知っているが、バイオリンと歌声の主は知らない。おれは父さんに案内されたおれ一人だけに与えられた広い部屋から出て、耳をすませながら、無駄に幅の広い廊下を歩きはじめた。

靴をはいているのに、床の冷たさを感じるような気がする。

天井は高く、窓も大きく、歩きながら外を見てみると、なだらかな土地の所々に小さな家がぼつぼつあるだけで、大自然という感じだった。

「...本当に、何にもないんだ」

突然おれの周りの世界が変わり、現実感のない現実に響いている綺麗な音は余計におれを独りにしていた。

どれぐらい寝てたのか分からないが、不思議なことに体は軽くて、歩きながら目を閉じる。

バイオリンの音は、バイオリンに詳しくないからよく分からないけどとても綺麗だと思う。歌声は、とても気持ちよさそうだ。声が透き通っていて、この大きな家全体を震わせている。

3つの個性的な音色が合わさって、響く、その音楽を聴きながら、おれは目を閉じたまま歩いていた。

「待ってください！」

ハッと目を開けた。

「.....あいつだ」と、小さな声で呟く。廊下のかなり先にあいつがいた。おれは思わずそばにあった部屋の扉をあけてその中に入り、顔の半分だけのぞかせる。

「父上！」

"ハルシオン様"が、必死に"父上"を追いかけている。

「.....なんだ、あいつあんな顔出来るんだ」

当たり前だ。それなのに何故おれはさっき、あいつをあんなに怖がったのだろう。いや、多分、あいつがまとっている雰囲気は普通じゃなかったからだ。それは今も変わらないが、おれが今見ている彼と、さっきの彼とは、すでに印象が変わりつつあった。

「父上！」

何も聞こえていないかのようにおれのいる方へと歩き続ける"父上"と、それを必死に追いかけるハルシオンに、流れるような音楽が添えられ、太陽の光は降り注ぎ、まるで絵みたいだと思った。

「父上、」

元皇族らしい彼の"父上"は、年齢やとても背が高いのをのぞいて、あまりにも彼にそっくりだった。今の中性的な彼も大人になったら、ああゆう風にかっこよくなるのかと、場違いなことを考えてしまう。

「父上」

でも、やっぱり、違うか。

「父上、」

彼もさっきは人間らしさを感じなかったが、今はそんなことはないし、それにこれは違うような気がする。彼の"父上"——フレリア・キティハルトから人間らしさが、何も感じられない。

まるで綺麗な、お人形みたいだ。

「父上！」

ふいにキティハルトは立ち止まった。

「何度言えば分かる。お前にはまだ早いんだ」

キティハルトは振り返らなかった。

「でも、ぼくは！」

走ってきたハルシオンはキティハルトを追い抜かして前に立った。おれに背を向けてるので彼がどんな表情をしているのか分からないが、おそらく端正な顔を歪め、自分の父親を見上げているのだろう。

「確かにお前のチカラの才能は底知れないし、頭も悪くはない。感も良いし、おそらく、俺以上になるだろう。しかし、お前はまだ子供で、チカラが強いがために、それをコントロール出来ない。よって、会議には参加させられない」

「……父上は、お変わりになりました」

「———そうかもな」

「ちちうえ」

「俺はもう、今までと同じではいられないんだ」

それだけ言うと、キティハルトは彼の横を通りすぎて、今度はゆっくりとした調子で歩き出し、ハルシオンがそれを追う。

嫌な予感がした。

おれは扉の陰から飛び出して駆け出した。

「待ってください！」

ハルシオンがキティハルトの右手首を掴むと、

「—ッ、触るな！」

「あ…ッ」

「危ない！」

おれは走ることは自信があった。まあ、嫌な気がして少し前から走り出していたからでもある。

キティハルトの右腕にしがみついていたが、すぐに振り払われたハルシオンは少し飛び、ちょうど構えていたおれの上に勢いよく落ちた——はずだった。

「う、わ…！？」

空気が破裂するような微かな音が聞こえたと感じたときはすでに、おれとハルシオンの体は倒れ込む速度を落としていた。おれは彼の下敷きになったのに、痛みも感じることもなく呆然と高い天井を仰ぐ。

「———なんだ、今、の」

「………こんなものがあるから」

「え？」

おれの上に倒れ込んでいたハルシオンは立ち上がり、うつむいていた顔を上げた。おれは彼を見て、そして、言葉を失った。

「な、な...!？」

彼の体を縁取るように電気のようなものが走っている。

「こんなものがあるから、父上は!!」

「ちょ、落ち着け！」

おれも立ち上がり彼の腕を引っ張ろうとすると、何かに跳ね返された。今度は少し痛かった。ばちっとしか表現出来ない音がした。"何か"が彼を包んで守っている。ていうか、"何か"って、何なんだよ。

——ハルシオンは何なんだ...？

やっぱり普通じゃ、ないのか？

「くだらないな」

風がないのに黒い髪をなびかせ、全身から黄色の光る何かを発し、でも、彼はそれを拒否するように頭をかかえ震えている。そんな彼を見下し、キティハルトはうすら笑っていた。

あ、違う。ただ1つ、外見でハルシオンと違うもの。

目が、まるで猫みたいだ。

ハルシオンの目は紫なのに、キティの目は金色だった。

「...父上に」

ハルシオンはゆっくりと顔を上げる。すると音もなく彼の周りに起こっていた異常現象は消えた。

「今の父上にチカラは必要なのですか」

「そんなもの...」

おれに背を向けている彼の表情は分からない。

「そんなものは、用済みだ」

キティハルトはおれに一度も目を向けることなく、それだけ言い残してハルシオンとおれの横を通り過ぎていく。そして、少し離れた場所にあった角を曲がり、完全に見えなくなってしまった。

「...やっぱり」

「え？」

キティハルトが消えた角をぼんやりと見ていると、ハルシオンがぼそっと何か言った。おれはそっと彼の横に並びなおし、彼の顔をのぞき込んだ。

「ハルシオン...？」

それでも、彼もまた、おれを見ようとしなかった。

ただ自分の足下を見つめ、目を細め、笑っていた。

「それじゃ、やっぱり、ぼくは、」

すっかり忘れていた音楽が今頃聞こえ始めた。

さっきより曲調が激しくなっている。

「ぼくは、もう」

「_____.....？」

彼が何を言っているのか、おれには全然理解できなかった。